

東京藝術大学 奏楽堂 モーニング・コンサート Morning Concert

第 10 回

2026年 8 月29日(土)

指揮：角田鋼亮

藝大フィルハーモニア管弦楽団

小野寺陸（バリトン）

マーラー：《子どもの不思議な角笛》より

「この世の生活」「原光」

「戦争鼓手」「少年鼓笛兵」

神宮司悠翔（ピアノ）

プロコフィエフ：ピアノ協奏曲第3番 ハ長調 作品26

11：00開演 東京藝術大学音楽学部第6ホール

主催：東京藝術大学音楽学部・東京藝術大学演奏芸術センター

◆小野寺陸（院2年：バリトン） ONODERA Riku

マーラー：《子どもの不思議な角笛》より「この世の生活」「原光」
「戦争鼓手」「少年鼓笛兵」（演奏時間約21分）

岩手県平泉町出身。

北海道教育大学岩見沢校芸術課程音楽コース声楽専攻卒業。東京藝術大学大学院修士課程音楽研究科声楽専攻在学中。第79回全日本学生音楽コンクール東京大会第一位並びに同コンクール全国大会優勝。第31回おきでんシュガーホール新人演奏会グランプリ（最高位）受賞。令和5年度札幌新人音楽会大賞（最高位）受賞。第2回国際声楽コンクール大学生部門優勝。北海道教育大学・学生表彰受賞。第37回ハイメスコンクール優秀賞。札幌市民芸術文化財団の推薦を受け、若手歌手育成プログラムに参加。日本演奏家連盟主催 新進演奏家育成プロジェクト・オーケストラ・シリーズにて札幌交響楽団と共演。2024年度明治安田生命音楽学生奨学生。2025・2026年宗次エンジェル基金/日本演奏家連盟奨学生。オペラでは北海道二期会やhitaru opera projectをはじめ、主要キャストとして多数の出演を重ねる。これまでに喜劇〈こうもり〉、〈トスガ〉、〈泣いた赤鬼〉などに出演し、いずれも好評を得る。コンサートではL.v.ベートーヴェン《第九》、G.マーラー《さすらう若人の歌》のソリストを務める。その他にStudio26主催〈未来へつなぐコンサートVol.4〉に出演しオールドイツリートプログラムのリサイタルを行うなど、歌曲分野の研究にも意欲的な姿勢を持つ。



《子どもの不思議な角笛（Des Knaben Wunderhorn）》は、ドイツの民謡や伝承を集めた詩集をもとに、グスタフ・マーラーが作曲した歌曲集である。詩には子どもや兵士、市井の人々が登場し、人間の営みや心情が描かれている。

「Das irdische Leben（この世の生活）」は、飢えに苦しむ子どもと、それに応えられない母親とのやり取りを描いた作品である。子どもは「パンを食べたい」と繰り返し願うが、母親は「もう少し待ちなさい」と応え続ける。その間にも時間は過ぎ、子どもは命を落としてしまう。切迫感のある伴奏と繰り返される言葉によって、日常の中に潜む残酷さや人間の無力さが強く印象づけられる。

「Urlicht（始源の光）」は、素朴で純粋な信仰心を歌った作品である。苦しみで満ちたこの世から神のもとへ導かれ、永遠の命を願う心が静かで敬虔な旋律によって表現されている。後にマーラーはこの曲を交響曲第2番《復活》の第4楽章に取り入れており、歌曲と交響曲との結びつきを象徴する作品の一つでもある。

「Revelge（起床喇叭）」は、戦場へ向かう兵士たちの行進を描いた作品である。勇ましい行進曲のように始まるが、内容が進むにつれて戦争の悲惨さが浮かび上がる。傷ついた兵士は助けを求めることもできず、仲間たちは前進を続ける。そして最後には亡霊となった兵士たちが太鼓を鳴らしながら行進するという幻想的な場面へ至る。力強い音楽と悲劇的な内容との対比によって、戦争の虚しさや皮肉が鮮烈に描かれている。

「Der Tamboursg'ssell（少年鼓笛兵）」は、処刑を目前にした若い鼓笛兵が、自らの運命を静かに受け入れていく姿を描いた作品である。死への恐怖を激しく表現するのではなく、淡々と別れを告げる姿が、かえって深い悲しみを感ぜさせる。行進を思わせるリズムは最後まで保たれるものの、その響きは次第に静まり、作品は幕を閉じる。マーラーは一人の兵士の最期を通して、戦争によって失われる命の重みを描き出している。

これら4曲は、それぞれ異なる題材を扱いながらも、「生と死」「戦争」「信仰」といった、人間の存在に深く関わる主題をさまざまな角度から描いている。マーラーのオーケストラを伴う歌曲作品は、彼の交響曲創作の源泉ともいえる存在であり、《子どもの不思議な角笛》はその中でも重要な位置を占める歌曲集である。

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。今年度は第6ホールでの開催となり、お客様との距離が近い空間で演奏できることを大変嬉しく思っております。その一方で、皆様により直接音楽をお届けできるからこそその緊張も感じながら、本日の演奏に臨みます。

世界が少しずつ平穏から遠ざかっているように感じられる今、この作品に描かれた「生」「死」「戦争」「信仰」というテーマは、決して過去のものではなく、私たちにも深く問いかけてくるものだと感じています。その思いを胸に、一曲一曲を大切に歌わせていただきます。

最後になりましたが、本公演の開催にあたりご尽力くださった先生方、共演者の皆様、スタッフの皆様をはじめ、ご関係くださったすべての方々に心より感謝申し上げます。そして、本日も越しくくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

（小野寺 記）

◆神宮司悠翔（3年：ピアノ） JINGUJI Yuto

プロコフィエフ：ピアノ協奏曲第3番 ハ長調 作品26（演奏時間約30分）

第73回全日本学生音楽コンクール全国大会ピアノ中学校の部第2位。第22回日本演奏家コンクールピアノ部門中学生の部全国大会第1位。第46回ピティナピアノコンペティション特級銀賞。第23回ショパン国際ピアノコンクール in ASIA プロフェッショナル部門最終審査銅賞。第5回ミラノ派遣オーディション最終選考会最優秀賞。第5回日本ショパンピアノコンクール2024入選。第12回浜松国際ピアノコンクール出場。第4回ノアンフェスティバル ショパンインジャパンピアノコンクールにてショパン・ナイト賞を受賞し、フランス・ノアンにて開催された同フェスティバルに出演。またラ・フォル・ジュルネ TOKYO 2025 丸の内エリアコンサート等、多数のコンサートに出演。2024年笠原智廣ピアノアカデミーコンクール強化特待クラス登利平特別給費特待生。2025年度東京藝術大学内にて伊達メモリアル基金より「アリアドネ・ムジカ賞」を受賞。現在東誠三、梅田智也、日比谷友妃子、石井晶子の各氏に師事。東京藝術大学宗次徳二特待奨学生として東京藝術大学3年在学中。



セルゲイ・プロコフィエフは1891年、ロシア帝国（現在のウクライナ）に生まれた。父は農業技術者、母は農奴の家系の出身でありながら音楽教育を受けた人物で、幼い頃から母にピアノを学ぶ。5歳で初めて作曲し、9歳でオペラを書くなど、幼少期から非凡な才能を示した。「ピアノ協奏曲第3番」の作曲は1917年頃に始まったが、ロシア革命の勃発によりシベリア、日本を経てアメリカへ亡命したため、一時中断される。その後1921年にパリで完成し、同年、作曲者自身の独奏によって初演された。

第1楽章 Andante - Allegro

ソナタ形式。クラリネットの独奏による穏やかな序奏で始まり、Allegroに入るとピアノが力強く登場する。オーボエが歌う抒情的な第2主題や、ピアノによる3連音のモチーフなど、多彩な表情を見せながら展開していく。

第2楽章 Andantino

抒情的な変奏曲形式。バロック時代のフランス舞曲であるガヴォットを主題とし、5つの変奏が続く。第1変奏はピアノ独奏で始まり、最後に木管が主題を引き継ぐ。続く第2変奏ではトランペットが主題を担当し、ピアノはアレグロで勢よく駆け回る。第3変奏では、低弦の規則的な拍に対し、ピアノがずらすようにアクセントを置いて奏でる。第4変奏では瞑想的な旋律がピアノによって歌われ、第5変奏は低音から始まるリズム的な音型を経て、ロシア舞曲風の主題が次第に華やかさを増し、静かなコーダで締めくくられる。

第3楽章 Allegro, ma non troppo

ロンド形式。作曲者が亡命途中の日本滞在中に聴いた長唄《越後獅子》の影響を受けたという俗説がある。活気に満ちた主題をピアノが力強く提示し、オーケストラとの緊密な掛け合いを繰り広げる。途中には抒情的な旋律も現れるが、再び鋭いリズムと華麗なパッセージが楽章全体を支配していき、壮大なクライマックスを経て華々しく全曲を締めくくると。

本日はモーニング・コンサートにお越しくださりありがとうございます。本日演奏させていただくこの曲は、まるでファンタジーの物語を彷彿とさせるような、大変魅力溢れる曲です。今の自分なりに、この作品が織りなす幻想的で色彩豊かな世界を精一杯表現したいと思います。皆様それぞれの物語を思い描きながら、お楽しみいただけましたら幸いです。

最後になりましたが、指揮の角田鋼亮先生、藝大フィルハーモニア管弦楽団の皆様、いつも熱心にご指導くださる先生方、この演奏会のためにご尽力いただいた沢山のスタッフの皆様、これまで支えてくださった全ての方々へ、心より感謝申し上げます。

（神宮司 記）



©Makoto Kamiya

東海高校卒業後、東京芸術大学大学院指揮科修士課程並びにベルリン音楽大学国家演奏家資格課程修了。2002年、安宅賞受賞。2008年、カラヤン生誕100周年記念の第4回ドイツ全音楽大学指揮コンクール第2位入賞。2010年、第3回マーラー指揮コンクールにおいて最終の6人に残った。これまでに、ベルリン・コンツェルトハウス管、ブランデンブルグ響、上海歌劇院管、札幌、山響、仙台フィル、群響、N響、読響、都響、東響、東京フィル、日本フィル、新日本フィル、東京シティ・フィル、神奈川フィル、名古屋フィル、中部フィル、愛知室内オケ、アンサンブル金沢、京響、大阪フィル、日本センチュリー響、広響、九響等と共演している。

2015年よりセントラル愛知交響楽団の指揮者を務め、2019年より常任指揮者に就任。2016-2020年大阪フィルハーモニー交響楽団指揮者、2018-2022年 仙台フィルハーモニー管弦楽団指揮者を歴任するなど、いま日本で最も期待される指揮者の一人として各地にて活躍の場を拡げている。2016年「第11回名古屋ペンクラブ音楽賞」、2020年「令和元年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞」「名古屋市文化振興事業団第36回芸術創造賞」を受賞。現在、セントラル愛知交響楽団音楽監督を務めている。

管弦楽：藝大フィルハーモニア管弦楽団 The Geidai Philharmonia Orchestra, Tokyo

東京芸術大学音楽学部に附属するプロフェッショナル・オーケストラ。オーケストラ演奏を専門とする「演奏講師」を主体に構成されている。定期演奏会では、器楽科・声楽科の教員との協演も含む意欲的なプログラムを展開。また、声楽科との「合唱定期」、オペラ専攻との「オペラ定期」、年末恒例の「チャリティーコンサート メサイア」（朝日新聞厚生文化事業団・朝日新聞社主催）などを行っている。選抜された器楽科・声楽科の学生との協奏曲等の共演や作曲科の学生による管弦楽作品の初演を行う「モーニング・コンサート」シリーズ、指揮科の学生との演奏会・試験・演習、東京藝大ジュニア・アカデミーに所属する中学生との協奏曲の共演などを通じ、次世代の育成にも資している。学外での活動も積極的に行っており、近年では新国立劇場、彩の国さいたま芸術劇場、長崎県五島市、新潟県長岡市、魚沼市、秋田県秋田市、茨城県取手市での公演が好評を博した。終戦の日の「全国戦没者追悼式」では毎年、奏楽を担当。2025年からは「日本管打楽器コンクール」の各部門最高位入賞者が協奏曲を披露する「特別大賞演奏会」にて管弦楽を担当している。海外では、2017年6月のチリでの4公演（日本・チリ修好120周年記念）に続き、2023年12月には、アルゼンチンのコロン劇場（Teatro Colón）での公演で満員の聴衆を魅了した。また2024年12月、ヴァイオリンの巨匠ジェラルド・プーレ氏とともにベートーヴェンの協奏曲のCD録音を行なった。（公社）日本オーケストラ連盟準会員。



ソロ・コンサートマスター
植村 太郎

コンサートマスター
澤 亜樹 ◎
對馬 佳祐

第1ヴァイオリン

荒井 友美
生田 絵美
加藤えりな
金子 芳子
河野由里恵
佐原 敦子
菅谷 早葉
西田 史朗
前田 奈緒
増尾 朗子
菊池 武文 *
小寺 麻由 *
松下 眞子 *

第2ヴァイオリン

村津 瑠紀 ○
山本 有紗 ○
清岡 優子
小暮 莉加
小杉 結
野田 良子
福井 彩花
福崎 雄也
マヤ・フレーザー
宮本 有里
荒巻美沙子 *

ヴィオラ

安藤 裕子 ○
吉田 篤 ○
阿部 哲
相岡 弥生
中川玲美子
麻柄明日香
森 朱理
有山 志音 ◆

チェロ

羽川 真介 ○
山澤 慧 ○
寺井 創
豊田 庄吾
夏秋 裕一
松本 卓以
磯野 正明 *
薄井 信介 *

コントラバス

赤池 光治 ○
長坂 美玖 ○
倉持 敦
小室 昌広
佐々木大輔 *
沼野 仁美 *

フルート

細川 愛梨
山本 葵

オーボエ

戸田 智子
山田 涼子
岡 北斗 *
菅原 郁弥 ◆

クラリネット

濱崎 由紀
春田 傑
林 みのり ◆

ファゴット

坪井 祐樹
宮崎 寿理
石井野乃香 *
村山 奈菜 *

ホルン

谷 ひな子 ○
岡村 陽
堂山 敦史
梁川 笑里
前田 梨花 ◆

トランペット

平山あかり
星野 朱音
星野 究 *
森 葵 *

トロンボーン

東川 暁洋
久保田和弥
松ヶ野土筆 *
山口 隼士 *

テューバ

藤田 裕人 ◆

ティンパニ&パーカッション

井手上 達
ニッ木千由紀
安藤 僚 *
長澤 莉佳 ◆

ハープ

奥田 恭子 *

楽団長

福中 冬子

事務局長

酒井 敦

事務局次長

小宮山雄太（チーフ・ステージマネージャー）
小久保綾子（チーフ・ライブラリアン）

スタッフ

葛谷 拓摩（インスペクター）
成迫 萌桜（インスペクター補佐）
森本 直通（ステージマネージャー）
徳永 芽久（アシスタント・ステージマネージャー）
神山 巧弥（ステージスタッフ）
中村 淳（ステージスタッフ）
安田 沙織（ライブラリー）
廣田 碧（ライブラリー）
小林 世佳（ライブラリー）
山田 大（広報強化）
足立 優司（演奏活動強化）
野村 智行（庶務）
松井 勝幸（会計）

◎：コンサートマスター
（本公演）
○：首席奏者
*：賛助出演
◆：本学学生

発行：2026年8月29日(土) 東京芸術大学
編集：東京芸術大学音楽学部
〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8
お問い合わせ：東京芸術大学演奏芸術センター
TEL 050-5525-2300
※無断転載・複写・引用などを禁じます